

ゲノム編集といのちの始まりへの介入 - 子どもを選び、作り変える遺伝子医療？ -

科学技術の進歩は我々の生活に可能性と希望を与えてくれるのであろうか。確かに新たな医療技術によって、治ったり症状が軽減したりする人も多い。認知症やパーキンソン病のような難病の治療法の研究も進んでいる。とりわけいのちの始まりの段階に介入し、ひいては遺伝子を改変する医療が注目されている。

特に注目度が高いのが、2013年に公表されたクリスパー・キャス9（CRISPR/Cas9）によるゲノム編集の技術である。DNAの塩基をいとも簡単に切り、その上、正確に狙ったところを改変すると言われている技術である。遺伝子組み換えはこれまでもなされてきたが、人間への適用は限定的だった。ところが、新たなゲノム編集DNAは人間という種のあるあり方を変えてしまう可能性を孕んだ技術である。

いのちを選ぶ医療はすでに行われており、胎児に対する検査で障害の要因が発見されると産まないようにする出生前診断は、ここ数年の間に日本でも広く行われるようになってきている。体外受精でできた受精卵を遺伝子検査して病因のあるものを排除する着床前診断は今のところ日本ではごく限定的にしか行われていないが、許容される国々があり、日本でも増大する可能性がある。

さらに、世界を見渡せば、受精卵（胚）にゲノム編集を施すことで、疾患要因を取り除き、正常化しようとする研究も進められている。受精卵や生殖細胞にゲノム編集を施すことになると、それが次世代に受け継がれていくことになる。

こうした医療は子どもを選び、ひいては人を作り変えようとする医療である。19世紀末に優生学という名で「劣った遺伝子を持った人間」を淘汰しようとする科学が始められた。それはやがて、精神病者やひいては「劣った人種」を排除しようとすることで、優生学は悪しき科学、あるいは科学もどきと捉えられた。だが、今や「子どもを選び、ひいては人を作り変えようとする医療」が「新しい優生学」として肯定されようとしている。

ゲノム編集技術の医療応用が、こうした方向に進んでいくのだろうか。あるいはそれを防ぐための国際的合意を作る方向へと進んでいくのだろうか。むしろ、いま社会に必要なのは、障害者も健常者と同様の生活ができる様に支援するべきノーマライゼーションの理念ではないか。政府の総合科学技術イノベーション会議や日本学術会議でも受精卵を素材とするゲノム編集の基礎研究の許容如何の討議が行われているが、会場の皆さんと意見交換しつつ、医学・医療領域におけるゲノム編集技術のあり方を考えてみたいと思います。

記

日時 2018年1月14日（日）13時15分～16時30分 13時開場
場所 日比谷図書文化館 日比谷コンベンションホール（大ホール）
（東京メトロ 丸の内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」、JR「新橋駅」）

テーマ ゲノム編集といのちの始まりへの介入 -子どもを選び、作り変える医療？-
講演 出生前診断は必要なのか 利光恵子さん（立命館大学生存学研究センター）
13時20分～14時00分
遺伝子医療とは 天笠啓祐さん（DNA問題研究会員）
14時00分～14時40分
人の人による選択 勝木元也さん 基礎生物学者
14時40分～15時20分

パネルディスカッション

パネラー 利光恵子さん、天笠啓祐さん 勝木元也さん 神経筋疾患ネットワーク
15時30分～16時30分

資料代 1000円

主催 ゲノム問題検討会議 **共催** DNA問題研究会

問合せ 神野玲子 E-mail jreikochan@yahoo.co.jp 携帯番号 090-2669-0413